

日本OR学会創立40周年記念 九州支部シンポジウム ルポ

松山 久義 (九州大学)

一連の日本OR学会創立40周年記念行事のしんがりを承って、九州支部シンポジウムが平成10年1月20日(火)福岡ガーデンパレスにおいて開催されました。主催者の予想を上回る多数の方々にご参加いただき、盛会の内に終えることができました。関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

日本OR学会創立40周年記念九州支部シンポジウムは3部構成で開催され、第1部は創立40周年記念式典、第2部は刀根会長によるOR新潮流報告、第3部は村井前会長の特別講演であった。

第1部の創立40周年記念式典では、刀根会長の挨拶に続いて、梅沢長期計画委員会委員長から、「日本OR学会長期ビジョン」の報告があった。

大学の研究者は、自己の研究を推進するための環境として、OR学会の現状にほぼ満足しており、各研究領域において学会活動は活発化している。一方、企業の実務家からは、新しい実務課題へのORの対応が遅れており、『ORの名の下に』行われる実践活動が縮小しているとの批判がある。この現状認識の上に、従来からのORの充実・強化を目指すとともに、社会環境の変化に伴って拡大しつつある未開拓分野へ挑戦するORの展開・推進を目指すべきことが提言された。

さらに、将来のORのあるべき姿を実現するために、学会活動について、①長期計画の実行、②学会の公的地位の確立、③国際化への対応、④若い力の結集、⑤

学会のPR、⑥OR実践活動の支援、の6点にわたる提言が行われた。

シンポジウムの第2部では、刀根会長により「経営の科学としての新潮流」と題したOR新潮流報告が行われた。

1940年代から10年間ごとに区切ったOR/MSの歴史の概観の後、Model/Algorithm/Applicationのトロイカの重要性が強調され、ORの種々の活用事例を通じて、経営の科学であるORが『知のインフラ』としての地位を確立するためには、創造性、展開力、実現力の3つをバランスよく充実・発展させなければならないと結論づけられた。

昨年6月に東京大手町の経団連会館で開催された創立40周年記念行事で、刀根会長のOR新潮流報告をお聞きになった会員も多く、今年の会誌10月号に掲載されたルポにも紹介されているので、詳しい紹介は省略するが、今回の報告では、活用事例報告が增強され、また、40周年記念懸賞論文最優秀賞を受賞した本支部所属の藤田敏治会員(現在九州工業大学講師)の論文の紹介も交えて報告された。

第1部が始まる頃から、準備した60席がほぼ満席であったが、参加者がさらに増えつつあったので、第3部を始める前の休憩時間を利用して補助席を設けた。

シンポジウムの第3部では、「企業活性化の秘訣」



刀根 OR 学会会長挨拶



梅沢長期計画委員長



村井前会長

と題して、村井前会長（アサヒビール名誉会長、JR西日本名誉会長）の特別講演が行われた。

ご承知のように、村井前会長は、住友銀行から東洋工業（現マツダ）へ副社長として入られて『活性化』に成功され、いったん、住友銀行に副頭取として戻られた後、アサヒビール、引き続いて、JR西日本の『活性化』に成功された方であり、その秘訣の一端をお聞きしようという目的の企画である。本シンポジウムは、非会員にも公開されたが、参加した非会員の大部分のお目当ては、村井前会長の特別講演であったろうと思われる。

企業の活性化によって目指すべきものは、『変化に対応できる企業』であり、活性化に成功するための必要条件は、トップが明快な経営理念を示すことと、企業の構成員の危機意識を引き出すことである。また、顧客に喜ばれる製品・サービスを提供するには、徹底した顧客のニーズの把握が重要であることを、トップ自らが身を持って示さなければならない。さらに、顧客に喜ばれる製品・サービスを実現するには、若い人、特に、若い女性の感性を生かす環境を作り上げなければならない。

要約すると非常に固くなってしまふ内容を、東洋工業、アサヒビール、JR西日本でのご経験を交えて、独特の雰囲気の話術でお話しいただいた。

企業活性化のお話しの合間に、住友銀行の偉大な先

輩たちをはじめとして、これまでに会われた優れた方々の思い出を語っていただいた。聴衆の中の学生風の若者たちに対して、質問されたり、同意を求められたりしながら、人とのコミュニケーションの大切さと、常に人から学ぶという姿勢の大切さを話された。この2点については、ぜひとも若い人たちに伝えたいとの想いがひしひしと感じられた。

カメラ係のお嬢（オバ？）さんの意見では、この話題について話される時の前会長のお顔は『絵になる』とのことである。「女性の感性を尊重せよ」とのご教示に従って付記させていただく。

活性化を手がけられた各企業のお話の最後に、OR学会も俎上に乗せられた。財政状態はじり貧であるのに、会員の危機意識が希薄過ぎないか。非常に居心地のよい学会であるが、それが高じて親睦団体化している恐れはないのかとのご批判があった。これに対して、自信を持って反論できる会員は、かなり少ないのではなかろうか。

学会は、営利企業とは異質であるが、構成員が組織への帰属意識を持ち、構成員が一体感を持つことの重要性は変わらないはずであるとのご指導は謙虚に受け止めなければならない。

第3部の終了後、隣の部屋に移って懇親会が開催された。九州支部の会員にとっては日頃縁遠い、刀根会長、村井前会長、梅沢長期計画委員会委員長と親しくお話しできる貴重な機会を得て、大いにご満足いただいたことと思う。

また、九州支部開設当時から活躍して来られた会員の方々にもご出席いただいたので、日頃なかなか顔を合わせることの少ない会員同士が旧交を暖めあう機会にも利用していただけた。

九州支部の活動も研究会中心であり、大学の研究者間の交流はあっても、研究者と実務家との交流は活発とは言えない。梅沢長期計画委員会委員長が指摘されたOR学会の問題点を、規模を縮小した形で抱え込んでいる。今回のシンポジウムには、企業側から予想外に多くの出席者があり、この点でも、創立40周年記念行事を開催した意義は大きかったと思う。